

平壤

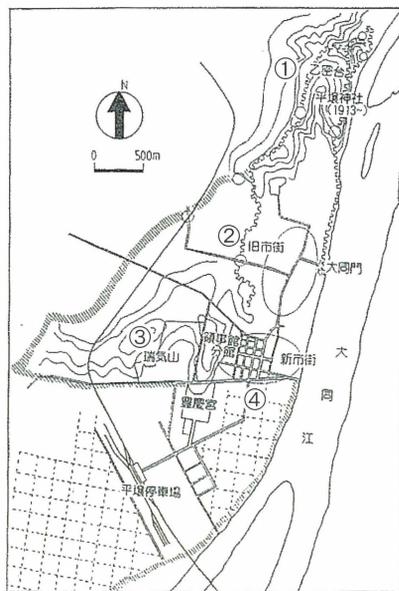
朝鮮半島第二の都市



VIEW OF THE AIRPORT LOOK FROM THE OTSUMITSUDAI, (Pyeongyo).
 五島山平壤から見た空港の風景(平壤) (外部写真)
 [乙蜜台から大同江を望む]→地図A-① 陵羅島水源を越して航空隊基地、その向こうにはガス会社、企業が見える。(c. 1930s)



THE KOREAN MARKET CROWDED WITH WHITE DRESSED KOREANS, PEYO.
 (新市街)出市人鮮韓のす話朝の衣白 (朝市街)
 [旧市街]→地図A-② 朝鮮人向けの市場や旅館がひしめき、さまざまな性別、年齢の白衣姿の人びとであふれている。(c. 1920-30s)



地図A 1909年頃の平壤市街図(五島山「日本統治下の平壤における街路整備に関する研究」『土史研究』14号、1994年、4頁)

六世紀、南北に流れる大同江の西側に高句麗の首府として平壤城が築造された。

平壤城は、北城、内城、中城、外城からなり、総面積約二二平方キロもある広大な城郭都市であった。一九二〇年の韓国併合後、平壤府と改められて、二二年には釜山府をぬいて朝鮮半島第二の人口を有する商工業都市となった。

乙蜜台
 平壤は、李氏朝鮮末期の一八九六年に平安南道の首邑とされ、一九一〇年の韓国併合時には道庁所在地として位置づけられた。当時から伝わる平壤の八景とは、牡丹峰(モラン)

大和町

北城、内城は旧市街として朝鮮人の居住区、中城の南側に形成された新市街は日本人の居住区といった棲み分けがあった。

平壤への日本人の移住は、日清戦争後にはじまる。当時の日本人は、大同門附近の城内に一〇〇名あまりが住んでいたにすぎなかったが、一九〇五年日露戦争終了後に本格的な移住が始まると、〇六年にはその一六倍以上に膨れ上がった。城外には新市街が形成され、ここに日本人の商店、病院、郵便局などでき、上水道が整備されていった。平壤の植民地行政の中心は、この新市街、とくに大和町にあった。そのため、平壤の絵葉書には、しばしば大和町がとりあげられている。

ボシ(ウルミルデ)の乙蜜台、浮碧楼、永明寺、普通江、岳山、大同江の馬灘とであった。とりわけ乙蜜台からの景色はすばらしく、そこから見える大同江とともに、絵葉書にはよくとりあげられた。一九二三年一月には、牡丹峰で平壤神社の鎮座式がおこなわれた。御神体は天照大神・国魂大神である。一九一六年五月に正式に神社となり、新しい社殿も三六六年に建造された。

一九二二年以降も人口が増えつづけたため、第一期市区改正が実施された。平壤停車場から新市街を縦貫し、平壤神社方面に至る南北方向の連絡工事がおこなわれ、大和町通、



【平壤鉄道ホテル】→A-③ 地図1922年12月に開業した鉄道局直営ホテル。文化施設を完備していた。(c. 1920-30s) 瑞気山公園園山麓にあった。



【大和町通】→地図A-④ 新市街で最も繁華な通り。停留場「府庁前」に止まる路面電車。写真を拡大すると、「サクラビール」「プラトン文具」「少年倶楽部」など日本語の幟や看板が目立つ。(c. 1920-30s)

南門通の一部にも舗装がなされた。当時の平壤は、京城とは違って、道路のほとんどが砂利道であったし、道路幅は驚くほど狭かった。一九二七年からの第二期市区改正事業によって市区中心部の街路網の骨格は完成する。

鉄道ホテル

日露戦争のとき、軍用鉄道として京城と新義州をむすぶ京義線が敷設され、大同江に架橋されると、新市街から二キロほど離れた場所に平壤停車場が設置された。この駅周辺にも日本人が集住し、工場や官舎、兵営などの建物が集中した。

平壤駅から自動車で約五分のところには、鉄道局が一九二二年一二月に開業した平壤鉄

道ホテルがあった。もとの木造旅館柳屋に洋館を増築したホテルである。この文化施設はサロンとしても利用された。

路面電車

新市街と平壤停車場附近という二つの日本人町が離れていたため、住民は生活上の不便を訴えていた。そこで一九〇五年、平壤停車場前から大和町をむすぶ軌道交通が設置されたが、一〇年ほどで廃線となった。

つぎに登場するのが、平壤の絵葉書によく見られる路面電車である。一九二三年四月に平壤駅から新倉里まで複線ではじまり、当初は定員四〇名の車両一〇両で運行された。まもなく大同江の人道橋が開通すると、平壤郵便局前から分岐して橋

の向こう側までの単線を敷設した。その後、一九二五年、二七年にも新線の敷設や複線化がおこなわれ、大同江対岸に工業地や航空隊が設置されると、船橋里にまで拡張された。一九三〇年には西平壤駅まで延長されて、市街を南北に縦断した。

一九四五年八月一日、ラジオから終戦の勅諭が流された日の

夜、平壤神社は放火により焼失した。その日のち作家となる五木寛之(一九三二)は、平壤の町にいた。五木は、『運命の足音』(二〇〇二年)のなかで、次のように綴っている。

戦争に負けるという経験は、私たち日本人にとっては、はじめてのことである。しかも情けないことに、いままで植民地として支配していた土地で敗戦国の国民になることの重い意味が、私たちにはぜんぜん理解できなかったのだ。／要領のいい人たちが、政府高官の家族たちが、敗戦の直前から大きな荷物と一緒に続々と脱出しつつあることもまったく知らなかった。私たち一般市民は事態にどう対処していいかわからぬまま、政府の指示をぼうぜんとして待っていたのである。(一三二～一四頁)

一九四八年九月に朝鮮民主主義人民共和国が成立すると、平壤は臨時首都として変貌していく(首都に位置づけられたのは一九七二年)。大和町通は勝利通りと改名し、トロリーバスやトラムが走っている。牡丹峰は公園となり、平壤神社の跡地には牡丹峰劇場が建てられている。朝鮮戦争の際、米軍による空爆の被害は甚大だったが、都市区画、線路、駅舎の位置は変わっていない。(貴志俊彦)

(平壤の写真画像の出典は、京都大学東南アジア地域研究研究所グローバル情報ネットワーク「戦前期東アジア絵はがきデータベース」による。)

平壤